

窓

「窓」に寄せる思い
 「教育に寄せる心を開く小さな「窓」」
 小さな「窓」から広がる教育の世界が見えてきます。

 福島県教育センター
 「研修の一コマから」

所長 佐藤 敏宏

今年度、当教育センターで実施している研修の参加定員は3,513人。今年度は、この定員をほぼ満たした状況で、研修が進んでいます。その他にも、出前講座や、各地区に出向いて実施している研修もありますので、正確な人数の集計はしていませんが、おそらく延べ5,000人以上の教職員の皆さんに、当センターが関わる研修に参加していただいています。

その中のある研修の一コマをご紹介します。その研修では、参加者が少人数の班に分かれて、午前中にあらかじめ準備してきた指導案を基にして模擬授業を互いに見合い協議をし、それを基に午後には、班で一つの授業を構想し、それを班の代表の先生が模擬授業として実施して、よくできたところや改善点等を協議するものでした。午前中の模擬授業では、指示や発問がたどたどしく、自分でも不安なのか時折担当指導主事の顔を見ながら進めていた先生が、午後の模擬授業では、子供の思考を止めないように指示や発問が整理され、自信をもって授業をしていました。この間、昼の食事休憩も入れておよそ3時間ほどです。この3時間の間に行われていたことといえば、

- 一つの授業をつくるという共通の目標の下、班で意見を出し合いながら形にしたこと。
- 昼食を共にしたこと。

主にこの2つです。担当指導主事は、時々話し合いに介入はしましたが、取り立ててこの方がよいとか、ここを直した方がよいとかといった指導は、あえてしていませんでした。

令和6年4月に独立行政法人教職員支援機構（以下、NITSという。）が作成した『『研修観の転換』に向けたNITSからの提案（第一次）』には、教職員の姿について、「実践を重ねる中で、子供と関わり、同僚や保護者等と交流し、先輩教員から助言や指導を受け、経験を振り返り、自ら知識を得たりします。これらを通して、判断力を高め、教職の技に習熟し、子供観、学習観などを形成していきます。」と、記しています。

前述のエピソードの先生は、協議を通してご自身のうまくいかなかった授業を何とかしたいという気持ちと、班の仲間の助言やアイデアがうまく結びついて、教職の技をステップアップできたのではないのでしょうか。

ところで、もう一つの「昼食を共にした」は、どうでしょうか。

当センターでは、今年度から昼食を弁当形式から定食形式に戻しました。研修のために来所した皆さんが食堂で、会話を楽しみながら食事をしています。

因果関係は定かではありませんが、定食形式にしてから、午後の協議が活性化しているように感じます。おそらく、何気ない会話を通して心理的安全性を感じて、協議の際に、自身の気持ちを話しやすく、そして他者の意見を受け入れやすくなっているのではないのでしょうか。

研修のために来所する先生方は、研修を通して、何かを得ようとしてくださいます。私たちもそれに応えようと研修を構成しています。その際、何を学ぶかも大切ですが、どのように学ぶかの視点も大切であると考えています。教職員研修においては、研修参加者本人の学びたい気持ちと、同じ気持ちを持った他の研修参加者との交流の場、学びの土台となる心理的安全性、十分な振り返りの時間と場が特に大切だと感じています。これらがそろった時に、単に知識や技能を習得するのではなく、学びの過程全体を通して子供観や学習観などが形成されていくと考えます。

受講奨励制度により、研修に目が向く機会が増えていきます。研修というと、最新の情報や国や県の動向などに目がいきがちですが、過程を大切にしたい学びを通して、子供観や学習観を形成、更新していく学びも大切ではないのでしょうか。この学びの過程は、授業で児童生徒が探究的に学びを進めていく過程とよく似ています。ですから、前述のような環境が整えば、このような学びは各校の校内研修でも実現できるものと思います。当センターでは、研修実践を通してこのような学びを少しずつ広げていきたいと考えております。

本誌に関するご意見・ご感想、並びに研修に関するご質問等がございましたら、下記連絡先までお寄せください。

編集発行： 福島県教育センター
 TEL 024-553-3141 (代表)
 URL <https://center.fcs.ed.jp/>

〒960-0101 福島市瀬ノ上町字五月田16番地
 FAX 024-554-1588
 E-mail center@fcs.ed.jp

「学び続ける力」を高める学習指導の在り方（第二年次）

—研究協力校における実践的研究を通して—

「『学びの変革』ガイド」の作成と発信に向けて...

「学びの変革」の実現を目指し、令和5年度より新たにスタートした調査研究チーム（※以下、本チーム）の調査研究課題「『学び続ける力』を高める学習指導の在り方」が、2年目を迎えました。第一年次研究の「指導方法の工夫・改善を通して」では、研究の過程で「学び続ける力*1」が、「学びの変革」で示された3つの学びのうち、特に「協働的な学び」や「探究的な学び」と関連のあることが明らかとなりました（図1）。また、本チームで作成した「学び続ける力尺度*2」を使った研究協力校における実態調査では、「探究的な学び」に関する質問項目の平均値が、「協働的な学び」のそれよりも顕著に低い結果となりました（図2）。本チームでは、この結果を以下のように捉えました。

各教科・科目の学習で、「探究的な学び」が未だ十分には確立、浸透されていないのではないだろうか。

そこで、第二年次研究では、各教科・科目の学習における探究的な学びを充実させ、主体的・対話的で深い学びの実現につながる学習指導の工夫・改善のポイントを明らかにすることに焦点を絞って研究を進めることにしました。そして、2年分の研究の成果を、福島県の先生方が「学びの変革」を実現しようとする際の案内書として「『学びの変革』ガイド」にまとめ、発信を目指しています。

*1 端的に言えば、粘り強く学びをつなぎ、続けていく力のことであり、本研究では「知識等を活用しながら、協働的に取り組んだり、新たな課題を考えたりして、問題の解決に向かって粘り強く取り組み、学びの意味を見いだす力」と操作的に定義しています。

*2 4因子（協働的な学び実践力・協働的な学び調整力・探究的な学び推進力・探究的な学び適応力）16項目から構成されています。児童生徒の「学び続ける力」の他「協働的に学ぶ力」や「探究的に学ぶ力」の数値化が可能です。詳細は、当センター「研究紀要第53集」p.4-p.11をご参照ください。

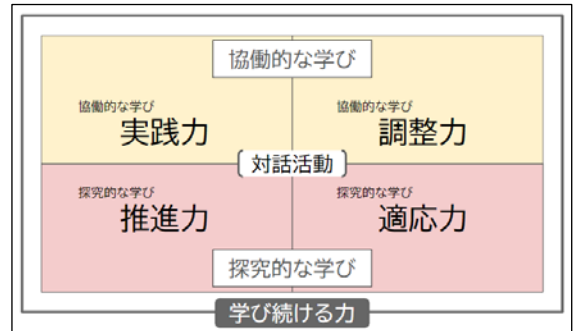


図1 「学び続ける力」の構造

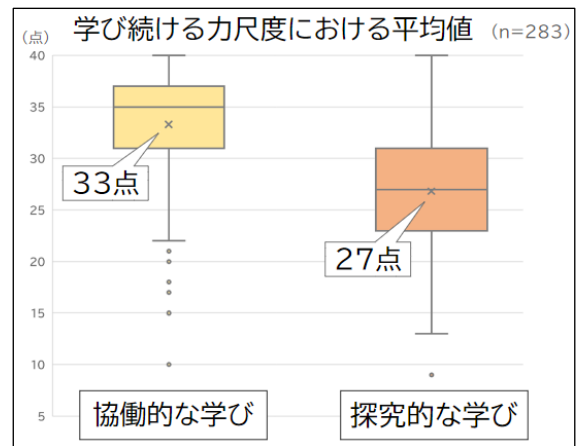


図2 課題となる探究的な学び

学習指導法考案の“これまで”と“これから”...

第一年次研究では、「協働的な学び実践力」と「探究的な学び適応力」を引き出す学習指導法について、それぞれ1つずつ実証的に検証しました（図3）。どちらも、児童生徒の学び続ける姿や、学びのよさ、学ぶ意味を見いだす姿につながりました。第二年次研究では、残りの「協働的な学び実践力」と「探究的な学び推進力」を引き出す学習指導法を考案し、同様にその有効性を検証します。そして、「学び続ける力」を高め、「学びの変革」を推進する学習指導法として「『学びの変革』ガイド」に盛り込みます。

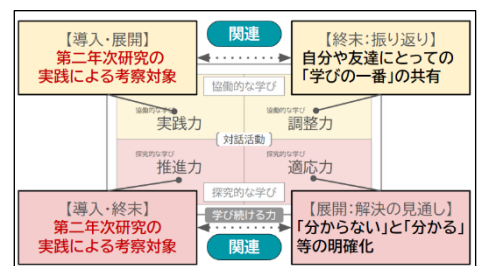


図3 本研究対象の学習指導法

探究的な学びを改めて考える切り口として...

探究的な学びを充実させるための鍵を、探究全般に関して他より詳細に記述されている「学習指導要領解説総合的な学習の時間（高等学校は総合的な探究の時間）編」に求めました（以下、「」は引用）。そして、「探究的な見方・考え方」に活路を見いだしました。「探究的な見方・考え方」は「探究的な学習」を支えるもので、「各教科等における見方・考え方」と総合的な学習の時間における「固有な見方・考え方」の2つを含みます（図4）。本チームでは、後者の「固有な見方・考え方」に着目しました。この「固有な見方・考え方」は、「特定の教科等の視点だけで捉えきれない広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究し、自己の生き方を問い続ける」という「総合的な学習の時間に特有の物事を捉える視点や考え方」であり、「教科等を越えた全ての学習の基盤となる資質・能力」です。この「固有」でありながら、「全ての学習の基盤となる資質・能力」ともなり得る、多様な角度から俯瞰して捉える力や問い続ける力の素地を、各教科等の学習でも育成することができれば、探究的な学びの実現や充実へさらに近づくことができるのではないかと考えました（図5）。

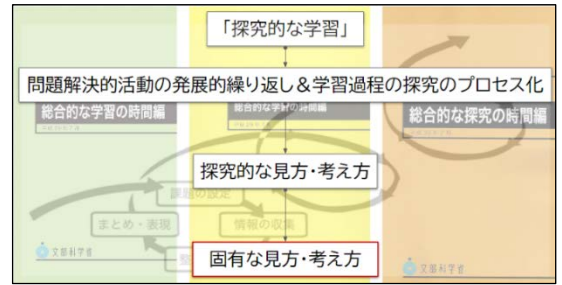


図4 探究的な学び解釈の論拠

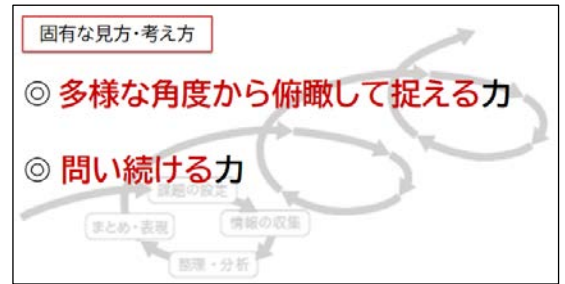


図5 探究的な学びを支える力

「学び続ける力」と批判的思考力の関係から...

どうすれば、探究的な学びを支える、俯瞰して捉えたり、問い続けたりする力を、児童生徒に育むことができるのか。そんな問いを抱きつつ、児童生徒の実際の学習の様子を観察していた時のことです。これまでの学びとの違いや提示された数字等の意味を、本来であれば俯瞰的に捉えたり、問い直したりして吟味する必要があるにもかかわらず、学んできた手順をそのまま踏襲して計算してしまう場面に遭遇しました。なぜ、一歩立ち止まって自分の考えを疑おうとしないのか。疑うために必要なものは、それを考える中でとり着いたもの、それが批判的思考力*3です。批判的思考力を高めることができれば、探究的な学びを支える、多様な角度から俯瞰して捉える力や、問い続ける力の高まりにつながるのではないかと。この仮説を基に、まず本チームでは、研究協力校の児童生徒に対して、学び続ける力と批判的思考力に関する質問紙調査を実施しました。その結果、学び続ける力と批判的思考力に相関が確認されました（図6）。そして、その結果を踏まえ、第2年次研究の「協働的な学び実践力」と「探究的な学び推進力」を引き出す学習指導法の考案に批判的思考力の視点を取り入れ、実践を通してその有効性を検証することにしました（図7）。現在、「規準（基準）や目標に基づいて意識的に考える」時間や場面をつくり出したり、充実させたりするための学習指導法について、目下実践および検証中です（図8）。

*3 楠見孝、2011『批判的思考力を育む一学士力と社会人基礎力の基盤形成』、有斐閣社

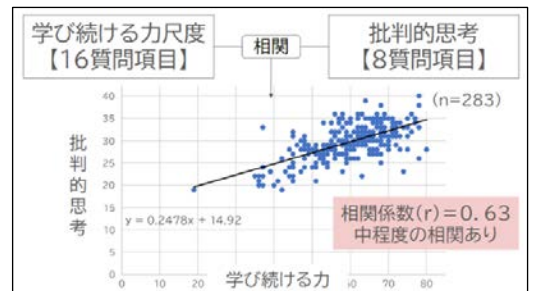


図6 批判的思考力着目の妥当性

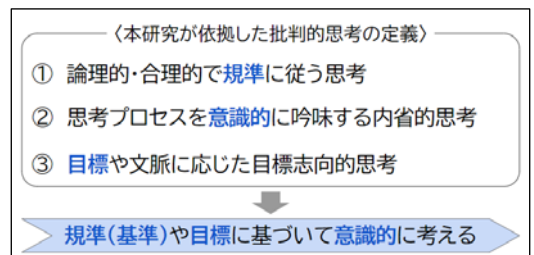


図7 本研究が依拠する批判的思考

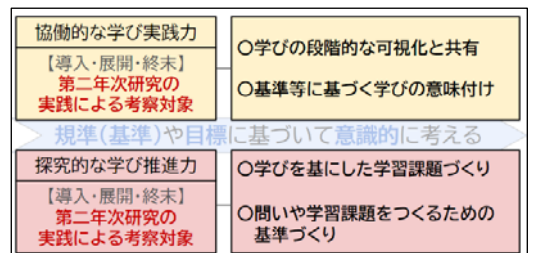


図8 4つの新学習指導法案

教員研修チームからの発信

皆さまこんにちは。今年度も7月中旬より本格的に専門研修が始まりました。ここでは英語科における専門研修の様子をご紹介します。

① B18 「英語パフォーマンステストと評価実践講座(話すこと・書くこと編)」[7月30日(火)]

「話すこと・書くこと分野において、パフォーマンス課題を作成・活用する力を高める実践的な研修を通して、観点別学習状況の評価を適切に行う力を高めること」を目的として、講座が実施されました。中学校10名、高等学校6名の先生方が集い、講義や協議、演習を通して、パフォーマンステストに関する知識や技能、評価を行う際の注意点や問題点、疑問点などを話し合いました。参加者からは「一人では悶々としてしまうところを、話しながら進めることで、難しいけれど最後まで話し合い続けることができました。」や「評価と指導の繰り返しの中で、生徒をよく観察して見取り、目の前の生徒のためにできることを日々行うこと、自分の指導を振り返り改善することの大切さを改めて感じた。」など、奥が深く、難しい課題ながらも先生方どうしで協力して取り組み、充実した研修になったことがうかがえました。



なお、この講座の姉妹編として、9月25日(水)には B19「英語パフォーマンステストと評価実践講座(聞くこと・読むこと編)」を実施予定です。講師として敬愛大学国際学部国際学科教授・英語教育開発センター長の向後秀明先生をお招きし、さらに学びを深め、スキルを磨いていきます。

② B21 「英語教員のための英語スキル向上研修(1日目)」[8月5日(月)]

この講座は「ヨーロッパ共通言語参照枠(CEFR)でB2レベルの英語力の獲得を目指す中学校、高等学校の英語教員に対し、英語スキルを向上させる研修を行い、授業を英語で行うための英語力の向上を図ること」を目的とした講座です。3回シリーズの講座であり、1日目の今回は会津大学准教授のニコラス・カー先生をお招きし、「リスニングスキルとリーディングスキルの向上」というテーマで行いました。参加者は中学校2名、高等学校1名、特別支援1名の合計4名と少数精鋭の先生方が All English の講座に果敢に挑みました。



参加者からは「リスニングスキルやリーディングスキルを身につけるには、予測したり、必要な語彙や、バックグラウンドや、リンクなどの英語の発音の特徴などについて学んだり、段階的に行っていくことが大切であることを学んだ」や「英語学習の意味や目的を改めて確認し、目標を達成するために何をすべきか逆算して期限までにやり抜くことの大切さについて考える、良い機会になりました」など、英語力や英語学習に対するモチベーションの向上のみならず、1人の英語学習者として自身を振り返る機会となったことがうかがえました。

この講座の2日目は10月15日(火)に同じく会津大学准教授のスチュアート・ベンソン先生をお招きし、「スピーキングスキルとライティングスキルの向上」というテーマで、3日目は11月25日(月)にオンラインで「英語スキル向上研修のまとめ」というテーマで、各自の英語力向上に関する現況報告やお互いの英語学習法等を共有する予定です。

令和6年度 生活科・総合的な学習の時間の研修紹介

今年度8月までに実施した生活科・総合的な学習の時間の研修について紹介します。

生 活 科

8月20日（火）及び21日（水）に、基本研修として小学校5年経験者研修の中で「生活科授業の充実のために」及び「生活科指導上の課題と改善」というテーマのもと、生活科の研修を行いました。両日合わせて8名の先生方が研修を受けました。少数だからこそ、お互いに日ごろの指導の悩みや改善策をじっくりと話し合うことができました。「気付きの質を高めるにはどうすればよいか。」「児童一人一人を丁寧に見取り、評価に生かすためにはどうすればよいか。」などについて、先生方が自分事として捉え、考える時間となりました。少しずつ改善案を見出せていけたことはもとより、同じ研修を受ける仲間としての意識も高まる大変充実した時間となりました。

以下は、研修を受けた先生方からの感想の一部になります。

「他の先生の課題について話し合っているとき、担任している子どもたちの姿を思い浮かべながら聞いていると、より実践的な学びにつながりました。また、それぞれの先生方が苦勞していることを自分も同じように苦勞していたり、うまくいっていたりと共感できることが多かったです。この協議で、自分の思考が整理されたり、新たな気付きが生まれたりしました。この協議を子どもたちにも授業で行うことができれば、きっと深い学びにつながるだろう信じ、これからの実践に励んでいきます。」

総合的な学習の時間

6月25日（火）に、基本研修として中学校中堅教諭等資質向上研修マネジメント研修の中で「地域特性を生かした探究活動」というテーマのもと、「総合的な学習の時間」の研修を行いました。午前中は福島大学教授宗形潤子先生を招き、講義を受けたり演習を行ったりしました。講義や演習では、なぜ地域特性を生かすことが必要なのかを理解したり、中学校の総合的な学習の時間を子供の側から考えたりする中で、総合的な学習の時間の意義について認識を深め合うことができました。午後は、センター指導主事がファシリテーターとなり、「生徒が自走する職場体験」というテーマのもと、生徒が自ら探究し始める職場体験を実施するにはどうすればよいかについて、班ごとに協議し、全体で共有しました。話し合う中で、研修者の先生方がわくわくしながら自己研鑽に励む姿が見られました。ミドルリーダーである先生方には、ぜひ勤務校の職場体験に新しい風を吹き込んでいただきたいです。

以下は、研修を受けた先生方からの感想の一部になります。

「子どもたちに自己決定の場を与えているか？という宗形先生の問いに、固まってしまいました。これまでを振り返ると、そのような場面設定はほんのひと握り程度にしか設定できていなかったと思います。子どもたちが好奇心を出せるように関わり、自分の地域課題に対して解決したいと思えるようなきっかけを与えることを学校全体で認識し、実現させたいと思います。」

今後も基本研修において、生活科・総合的な学習の時間の研修が実施されます。

また、11月25日（月）の専門研修では、小・中・高・特支を対象とした総合的な学習・探究の時間講座が実施されます。今年度の募集は終了しましたが、来年度も実施予定ですので、どうぞ奮ってご参加ください。

福島県の生活科・総合的な学習・探究の時間が更に充実するよう、ぜひ教育センターを活用し学びを深めていきましょう！

長期研究員の研究紹介

当センターの13名の長期研究員は、学校教育の今日的課題について理論的、実践的な教育研究を行っています。年度末には研究の成果を発信しますので、県内の先生方の実践にぜひ活用していただきたいと考えています。今回は、その研究内容を紹介します。

国語科

研究主題 (R5・R6)

「言葉を投げどころに読み深める力」を育てる
国語科授業の在り方
—児童の学びをつなぐ単元デザインを通して—

菊池 祥子(伊達市立掛田小学校)

問いを見出したり、考えの確かさやよさ等を自覚したりできる基準を、児童とともにつくります。単元を通して、基準を使い、児童の学びをつなげることで「言葉を投げどころに読み深める力」の育成を目指します。



国語科

研究主題 (R6)

自らの考えを深めながら文学作品を解釈する力を
育む高等学校国語科授業の在り方
—多様な着眼点を相互理解する学習を通して—

齋藤 純一(福島県立船引高等学校)

文学国語の「読むこと」の指導において、生徒たちが文学作品の内容を様々な「着眼点」から相互理解し、自ら解釈する力を育てる授業の在り方について研究しています。



社会科

研究主題 (R5・R6)

「よりよく社会と関わる力」を育む社会科指導の在り方
—多角的思考を促す問題解決的な学習の充実を通して—

富田 彩(伊達市立梁川小学校)

多角的な思考を促す問いの解決を繰り返し、問いを発展させます。問題解決的な学習の充実を通して、産業の発展や社会の在り方について多角的に考え、表現する力の育成を目指します。



理科

研究主題 (R5・R6)

実験結果を基に考察する力を育む
小学校理科学習指導
—自由試行から問題を見いだす活動の充実を通して—

後藤 太成(西郷村立小田倉小学校)

自由試行を通して得た気付きや疑問から「解決したいこと」を明らかにするなど、問題を見いだすまでの活動を充実させることで、実験結果を基に考察する力の育成を目指しています。



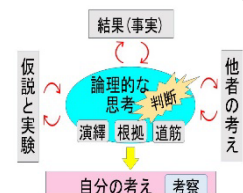
理科

研究主題 (R6・R7)

「科学的に探究する力」を育てる
中学校理科指導の在り方
—論理的な思考に基づいて判断する活動を通して—

安部 賢(白河市立白河中央中学校)

根拠を基に探究活動を進め、その過程と実験結果から言えることを論理的な思考に基づいて考察に表現することで、科学的に探究する力の育成を目指します。



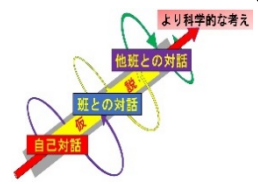
理科

研究主題 (R6)

「より科学的な考えに磨き上げる力」を育てる
高等学校化学分野の指導の在り方
—対話による探究の過程における仮説設定を通して—

石橋 亮宏(福島県立平工業高等学校)

生徒たちが見通しをもって問題解決できるよう、探究的な過程の中で「より科学的な考えに磨き上げる力」の育成を目指しています。



紹介した長期研究員による各研究の詳しい内容につきましては、令和7年3月に発行する「令和6年度研究紀要第54集」を御覧ください。

当センターのWebサイト(<https://center.fcs.ed.jp/>)から御覧いただくことができます。



英語科

研究主題

(R6・R7)

相手の発話に応じて話す力を高めるための中学校英語科学習指導の在り方 -主体的な気付きを促す単元を貫く言語活動の工夫を通して-

石井 愛(福島市立信陵中学校)

単元を通して、言語の働きを意識した言語活動を繰り返し位置付け、主体的な気付きを促すことで、相手の発話に応じて対話を継続・発展させる力の育成を目指しています。



英語科

研究主題

(R6)

「話すこと[発表]」の論理性を向上させる高等学校英語科指導の在り方 -統合的な言語活動を積み重ねる単元構想の工夫を通して-

野田 友里恵(福島県立郡山高等学校)

4技能5領域にわたる統合的な言語活動を単元内に散りばめ、根拠に基づいて自分の考えを話す力を育むと同時に、様々な見方・考え方に触れる機会を確保することで、話すこと[発表]における論理性の向上を目指します。



保健体育科

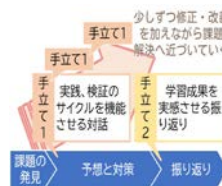
研究主題

(R5・R6)

課題解決への見通しをもつ力を育む中学校保健体育科指導の在り方 -「学びの視点」を基に、運動実践と検証を繰り返す学習場面を通して-

桃井 陽介(玉川村立玉川中学校)

体育の多様な関わり方から運動について考える「学びの視点」を基に、課題解決へ向けて仲間と共に話し合い、協力することによって、見通しをもつ力の育成を目指しています。



教育相談

研究主題

(R6)

高等学校における自ら意思決定できる生徒の育成の在り方 -自己のリソースへの気付きを促す学級での集団指導と保健室での個別支援を通して-

渡辺 瑞希(福島県立いわき翠の杜高等学校)

自己のリソース※への気付きを促す集団指導と個別支援を通して、困ったり悩んだりした際に、自己と向き合いながら自ら意思決定できる力の育成を目指しています。 ※その人の能力やこれまでの経験、支えとなる人、考え方や環境的なものを指す。



算数・数学科

研究主題

(R5・R6)

統合的・発展的に考察する力を育成する算数科・数学科授業の在り方
-「系統図」を活用した数学的な見方・考え方の成長を促す学習サイクルの工夫を通して-

佐藤 翔英(田村市立大越小学校)
齋藤 真実(大玉村立大玉中学校)
白石 裕太(福島県立小野高等学校)

長期研究員3名によるチーム研究です。子供が学びをつなげ、新たな数学を創り出していく力として、「統合的・発展的に考察する力」が挙げられます。今年度は、数学的な見方・考え方の成長を促すことで、「統合的・発展的に考察する力」の育成を目指していきます。具体的には、見方・考え方を視点にした学びのつながりが見える「系統図」を作成します。そして、この系統図から、統合的・発展的に考察するための手がかりとなる見方・考え方を捉えます。見通しの局面で、本時に働かせる見方・考え方を可視化することで、子供が見方・考え方を「自覚」して問題解決に動き出すことができるようになります。また、振り返りの局面で、本時に働かせた見方・考え方を同じように働かせた経験はないか、新たな問題解決に動き出すことはできないか、という過去と未来の視点で振り返ることで見方・考え方の「つながり」に気づくことができるようになります。見方・考え方の「自覚」と「つながり」を促すことで、統合的・発展的に考察する力の育成を目指します。



※ 学校名は、所属校(研究協力校です。)

令和6年度福島県教育研究発表会

～ 明日の 福島の 教育をつくる ～

令和6年11月21日（木）

9:50～16:00 開催



趣旨 本県学校教育の向上に資するため、県内公立学校教員の優れた教育実践・研究及び当センターの教育実践・研究の成果の発表と意見交換等を行う。

研究発表

学習指導、教育相談、情報教育等について、県内高等学校および当センターによる発表を行います。

実践発表

昨年度まで「ふくしま教育創造コンソーシアム」として実施していた県内の学校からの発表を行います。

参加方法等

詳細については、当センターWebサイト「福島県教育研究発表会」をご覧ください。

「Plant」の対応について

令和6年度に教育センターが行う基本研修、職能研修、専門研修について、受講者が研修を修了した場合、教育センターは年度末までにPlantに受講履歴を記録します。なお、記録に疑問がある場合は、教育センター総合企画チームに問い合わせてください。

来所時のご注意

教育センター付近で道路工事が行われ、来所する場合の経路が変わりました。特に自動車で来所する場合は、対向車や歩行者へ注意が必要になります。詳しくは当センターWebサイトをご確認ください。

カリキュラムセンター事業

カリキュラムセンターは、県内の公立学校の先生方や学校から、日常の教育活動でお困りのことについて相談を受け、様々な支援を行う窓口です。

カリキュラム全般にかかわる相談受付や教職員研修講師派遣の手続きについては、当センターWebサイトをご覧ください。



【お問い合わせ先】

福島県教育センター 総合企画チーム

TEL 024-553-3193 Email: center-kikaku-gr@fcs.ed.jp

